

# 第1章

この章は、小・中学生の学習の実態を調査した結果を報告している。調査の結果、小・中学生の学習の実態は、以下の特徴を有している。まず、学習の目的は、知識の習得と技能の向上にある。次に、学習の方法は、自主学習と協同学習の両方を用いている。また、学習の環境は、家庭と学校との両方を利用している。さらに、学習の態度は、主体的で積極的である。最後に、学習の成果は、学力の向上と生活力の向上にある。

# はじめに

## 第1章

### 小・中学生の学習の実態

この調査は、小・中学生の学習の実態を明らかにすることを目的として実施された。調査の結果、小・中学生の学習の実態は、以下の特徴を有している。まず、学習の目的は、知識の習得と技能の向上にある。次に、学習の方法は、自主学習と協同学習の両方を用いている。また、学習の環境は、家庭と学校との両方を利用している。さらに、学習の態度は、主体的で積極的である。最後に、学習の成果は、学力の向上と生活力の向上にある。

| 項目    | 調査結果         |
|-------|--------------|
| 学習の目的 | 知識の習得と技能の向上  |
| 学習の方法 | 自主学習と協同学習    |
| 学習の環境 | 家庭と学校        |
| 学習の態度 | 主体的で積極的      |
| 学習の成果 | 学力の向上と生活力の向上 |



## はじめに

この調査の特徴は、学習の表面、例えば勉強時間や勉強の好き嫌いといった側面だけでなく、小・中学生の学習のもっと詳細なあるいはもっと深い側面にまで焦点を当てているということにある。

これまで、多くの教師や研究者が、児童・生徒の学習方法についての研究を行ってきた。例えば、最近の法則化運動もその一つである。この法則化運動の中で、何かの課題を達成するためには、ただ長時間学習すればいいというものではないこと、いわんや「根性」を入れればいいというものではないこと、それぞれの課題にはそれぞれの課題にあった適切な学習方法があることが明らかにされてきている。

さらに、学習というものは、ただ何かを覚えればいい、何かの問題を解ければいいというものでもない。もちろん、与えられた問題を与えられた方法で解くスキルと態度とを身につけることは、学習の重要な側面である。しかし、学習がそれにとどまっていけない。子どもは、主体的に自分の将来を切り開こうとしている存在であり、そしてまた主体的に生きることを学習したがつている存在でもある。子どもたちは、例えば自分にとって何が課題となるのか、その課題にどのような立場でかかわるべきなのか、あるいはどのような方法を用いるべきなのか等々のことを、生まれつき知りたがつているし考えたがつて

いるのである。

学習を適切な学習方法、主体的存在としての学習という視点からとらえる本研究が、学習の表面にとどまらず、具体的な学習過程、主体的な学習過程、そして教科以外の幅広い意味での学習過程にまで踏み込んだものになるのは必然の結果である。

この章では、上述の視点に立ちながら、日本の児童・生徒の学習の環境、姿勢、方法、内容等を考察する。第1節ではまず家庭での学習を、第2節では学校での学習を、第3節では塾や予備校などの学校外学習機関での学習を、第4節では日常生活の中での広い意味での学習を、最後に第5節では以上の結果としての精神的・肉体的な疲労について検討する。

なお、今回の調査は全国の小学5年生、中学2年生、高校2年生を対象とした非常に大規模な調査であるが、ここで報告するのは主として小学5年生と中学2年生についての分析結果である。高校2年生の分析は、年齢別の変化を追うときに参考資料として提示する。また、小学5年生に対する質問項目は、中学2年生に対する質問項目（高校2年生は中学2年生と同じ）とは一部異なっており、その結果、一部のトピックスについては小学生のみを対象として分析したり、中学生のみを対象として分析したりしている。